平成 30 年度
福島県 大学生の力を活用した集落復興支援事業

南会津町耻風地区実証実験報告書

獨協大学地域活性化プロジェクト大竹チーム

指導教員 経済学部国際環境経済学科 大竹 伸郎

[目次] ページ

1. はじめに・・・2

2. 南会津町耻風地区の概要・・・3

3. 今年度の実証実験の取り組み・・・5

3.1. 南会津町「伊南川あゆまつり」への出店
3.2. 獨協大学「雄飛祭」における物産展の開催
3.3. 「草加ふささら祭り」への出店
3.4. 「獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo”」における物産展の開催

4. 今年度実施した実態調査・・・16

4.1. 耻風地区鬼渡り神社における神事体験
4.2. 耻風付近の飲食店調査
4.3. 蕎麦打ち練習

5. 次年度以降に向けた企画の提案・・17

5.1. 南会津町「伊南川あゆまつり」出店の継続化に関する提案
5.2. 獨協大学における物産展開催に関する新たな提案
5.3. 耻風の特産品を用いた商品開発継続の提案
5.4. 耻風住民向け広報誌「風の子通信」の継続刊行及び広報強化にむけた提案
5.5. 蕎麦打ちイベントの開催による耻風地区の認知度向上にむけた提案

6. おわりに・・・20

1. はじめに

獨協大学地域活性化プロジェクト大竹チームは飯島竜太郎(代表:経営学科 4 年)、小林風夏 (副代表:国際環境経済学科 2 年)、荒井眞子 (副代表:同 2 年)、山田雄大(同 4 年)、羽賀咲弥加(同 2 年)、澤田美結(同 2 年)、中川里佳子(経済学科 2 年)の 3 学科 7 名からなるチームである。さらにサポーターとして、森涼太(経済学科 2 年)、山本有紗(国際環境経済学科 2 年)も年度途中から加わり、計 9 名で活動している。2017 年度に地域調査を行った結果、耻風地区では少子高齢化の問題が進展しており、地域内の生活や伝統・文化などが維持できなくなりつつあることが明らかとなった。こうした状況を改善するためには、耻風地区の若年人口を増やすことが重要である。今年度はそうした課題の解決策として、交流人口の増加が考えられる。地域の祭りを盛り上げる活動を中心に、交流人口・関係人口の増加に向けた実証実験を行った。

実証実験の内容としては、まず、交流人口や関係人口の増加につながる活動として、南会津町で行われている「伊南川あゆまつり」に耻風地区と合同で参加した。その他、獨協大学の学園祭や“Earth Week Dokkyo～Summer～”や“Earth Week Dokkyo～Winter～”での農産物販売や地域の PR 活動、毎年草加市で行われている「草加ふささら祭り」にも地域の方々と一緒に参加した。

さらに、これらの活動の際には、耻風地区の特産品である蕎麦を使った軽食やお菓子を地域の方々と一緒に開発するとともに、耻風地区の特産品のブランド化を進めるためのラベルのデザインや、PR 効果を高めるためのオリジナル T シャツなどを作成した。

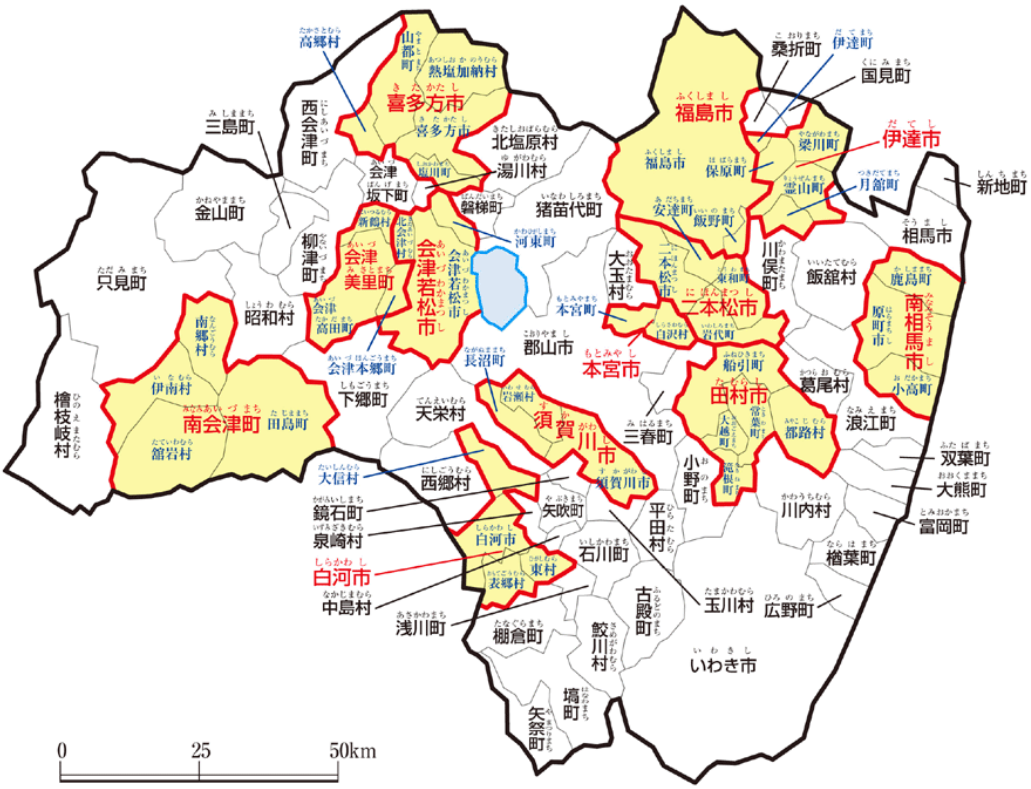
本報告書は、こうした取り組みについて詳細にまとめたものであり、構成は以下の通りである。まず第 2 節で、耻風地区の概要や地域の課題について考察する。第 3 節では、実証実験として行った様々な活動についてまとめている。第 4 節では、今年度新たに行った実態調査の結果についてまとめている。そして、第 5 節で次年度以降に向けた企画の提案をし、第 6 節で本報告書の結びとする。

2. 南会津町耻風地区の概要

福島県の会津地方の南部に位置する南会津町は、2006(平成 18)年に田島町・南郷村・伊南村・舘岩村の 1 町 3 村の合併により誕生した。本報告書の対象地域である耻風地区は、旧伊南村に属している(図表 1)。2019 年 2 月現在、南会津町の人口は 15,655 人(男性：7,674 女性：7,991)、世帯数は、6,702 世帯となっている。南会津町の総面積は、886.47km^2(福島県の面積の 6.7%)と広大であるが、森林率が 92%と山勝ちな地形である。域内には荒海山を水源とする阿賀川と伊那川が流れており、あゆ釣り客を中心とした観光資源となっている。また、江戸時代に整備された新潟とつながる会津西街道の宿場町としての景観を残すととも

に、5 本の国道が整備されている。南会津町の主要な産業は、農業や観光業であるが、町内に 4 つの酒蔵があるなど、昔ながらの伝統的な産業も残っている。同町の中心地域である田島町には、会津地方を代表する会津祇園祭が伝承されており各町内で大型の山車も保存されている。

図表 1　南会津町の位置と地域



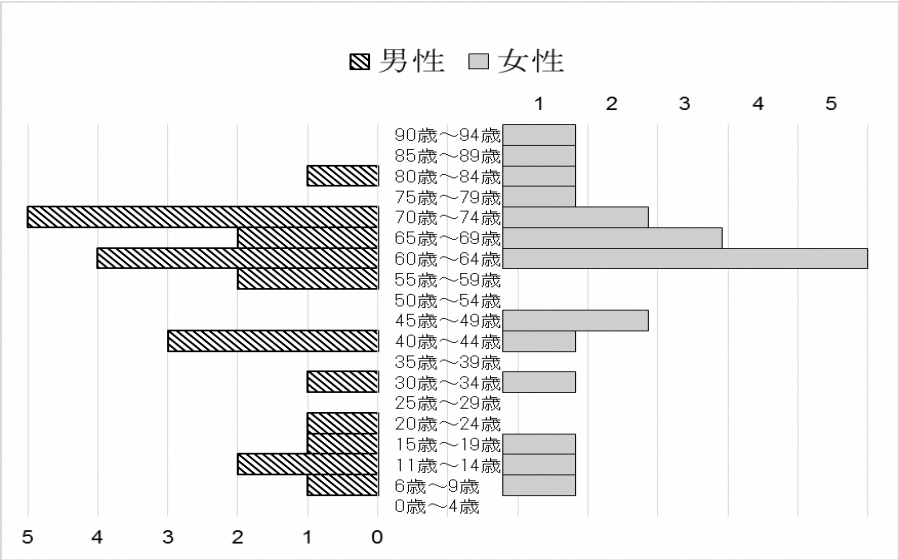
資料：国土地理協会 HP

図表 2 中の円は、耶風地区の位置を示している。耶風地区は東西を山に挟まれ南北に抜けた地形で、この山の間を通る風の最大風速は 40m/s を超えるなど、風の強い地域である。会津田島駅からは 40km ほど離れており、路線バスを利用すると 1 時間ほどの時間距離を要するが、国道の分岐点に近いため、自動車を利用すれば、多方面からのアクセスが可能である。主な産業は農業であり、蕎麦・果樹・野菜の栽培が盛んに行われている。寒冷地であることから、その冷涼な気候は稲作には適していないが、トマト栽培には適しており、同町の南郷地区で栽培されているトマトは「南郷トマト」として市場から高い評価を受けており、地域を代表するブランド野菜となっている。また、耶風地区では焼畑農業地域で栽培される日本古来の伝統作物である赤カブの栽培も行われている。

図表 2　耻風地区の位置

出典：国土地理院 HP「地理院地図」に加筆して作成

図表 3　耻風地区の人口ピラミッド



出典：人口統計ラボ耻風年齢別人口を元に作成
参考 URL(https://toukei-labo.com/2010/danjo.php?tdfk=07&city=07368&id=81)

図表 3 は、耻風地区の 2018 年現在の人口ピラミッドを示したものでる。この図から読み取れるように耻風地区では、ここ数年子供が生まれていないことが分かる。また、若年人口も少ないことが読み取れる。こうした年齢層の人口を増やすためには、大学生などの若者に、耻風地区の魅力を伝えるような、取り組みが必要であると思われる。そこで 2018 年度は、交流人口や関係人口の増加につながるような活動に取り組んだ。

3. 今年度の実証実験の取り組み

2018 年度の実証実験では、商品開発した蕎麦を用いたガレットの消費者の反応を見るために、「伊南川あゆまつり」と「草加ふささら祭り」に出店した。また、獨協大学学園祭「雄飛祭」と「獨協大学環境週間“Earth Week Dokkyo”」では草加市民に耻風地区について知ってもらうために物産展と耻風地区の写真、パンフレットの展示を実施した。図表 4 は、今年度の実証実験の活動日程の一覧である。

図表 4　2018 年度実証実験

日程	活動内容	内容
6 月 25～30 日	“Earth Week Dokkyo 2018～Summer～”にて物産展の開催	学校内での農産物の販売
9 月 9～10 日	第 1 陣訪問	神事体験、飲食店調査
10 月 13～15 日	第 2 陣訪問 「伊南川あゆまつり」に出店	蕎麦を使った商品開発、新商品の販売
11 月 2～3 日	雄飛祭にて物産展の開催	農産物の販売
11 月 4 日	「草加ふささら祭り」に出店	特産品を用いた新商品の販売
12 月 10～15 日	“Earth Week Dokkyo 2018～Winter～”にて物産展の開催	農産物の販売、特産品の試食会
2 月 7 日	第 3 陣訪問	雪下ろし・蕎麦打ち講習会
2 月 20 日	蕎麦打ち練習	大学内で、蕎麦打ち練習

3.1. 南会津町「伊南川あゆまつり」への出店

9 月の第 1 陣での訪問時に、蕎麦粉のパッケージデザインを提案した。その際にガレットが作れることを提案し蕎麦の新しい使い方として評価を得た。そこで、南会津町の「伊南川あゆまつり」で実際にガレットの販売をする新たな取り組みを行った。ターゲットは蕎麦粉を使った料理に関心を持っているであろう 20 代以上の女性とした。今回は地区の方との共同出店を行い、赤カブなどの野菜や飲料も同時に販売した。

「伊南川あゆまつり」の事前準備としては、調理機材は次年度以降の共同イベントも視野に入れ、区費でホットプレートを新規に購入した。また、売り場の統一感の創出と、本事業

の宣伝をするため、学生がデザインしたオリジナル T シャツを町内の企業に発注し、20 着作成した(写真 1)。

商品開発を行ったガレットは、本来皿に載せ、ナイフとフォークで食べるものだが、祭りの形態から立ちながらでも食べられるよう、生地に具材を挟み、片手で食べられる形にした。具材はなじみのあるベーコン、レタス、トマトをメインにし、味のイメージが付きやすいよう配慮した。生地は具材の味を邪魔しないように蕎麦粉の配合を低くし、かつ蕎麦の風味も残る配合比率を目指した(写真 2)。

写真 1 学生がデザインしたオリジナル T シャツ

写真 2 試作品のガレット

撮影日 2018 年 10 月 14 日

学生が自宅で試作したのち、学内でも試作しコンペ方式でガレットの具材や生地に使う蕎麦粉の量を最終決定した。販売目標は例年の来場者数から 100 食とし、原価率を 5 割にして価格は 400 円に設定した。また地区に前日入りし会津若松市内で食材、備品の買い出しを行い、夕方から地区の住民も集まって試食会を実施した。6 時頃から生地、野菜の下処理を地区の集会所にて行った。9 時頃会場に搬入し売り場づくりを行った。

結果は、目標の 100 食を 14 時頃に完売することができた。黒字分は地区が負担した経費の補填とした。多くの地区住民と共同で出店したことで、新たな交流が生まれ、その後の活動に弾みがついた。反省点としては、生地の配合比率の研究が予想以上に難航し、スケジュールが遅れ、販売のシミュレーションができなかった。予定していた購入者への紙面でのアンケートを準備不足のため実施できなかった。現場での対応として、できる限りテントの外に人員を配置し、呼び込みと同時に感想を聞くように努めたが、客観的なデータの収集と分析が必要であると感じた。なお、この日の活動は南会津町の広報紙に掲載された(図表 5)。

図表 5　広報南会津

まちの話題
news & topics

地域活性化への大きな一歩

耻風区と獨協大学生の交流がカタチに

新しい風で地域活性化に貢献する学生たち

耻風区と獨協大学経済学部の学生（耻風チーム）は、「大学生の力を活用した集落復興支援事業」により、平成29年度から区民との交流や体験を重ねながら、地域の活性化に取り組んできました。

学生の若い目線からさまざまな提案をいただき、試行錯誤を繰り返しながら互いに協力し合い、地元のそば粉を使用した「そばガレット」の開発に成功しました。

10月14日、伊南川あゆまつりに出店するため、会場に結集した区民と学生たち。

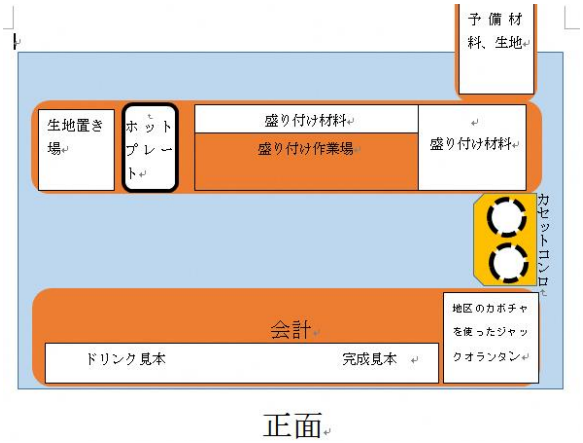
この日のために用意した商品は話題を呼び、あっという間に完売しました。

写真 3・4 南会津町「伊南川あゆまつり」での販売の様子

撮影日 2018 年 10 月 13 日

図表 6 は当日のテント内のレイアウトである。具のベーコンを炒めるために 2 口の自立式カセットコンロ 1 台と生地の焼成用にホットプレート 1 台を使用した。カセットコンロについては地区の方の物をお借りした。生地の焼成はホットプレートだけでは間に合わず、カセットコンロで焼く場面もあった。人員配置は、会計(写真 3)、呼び込み(写真 4)、カセットコンロ、ホットプレート、盛り付けの 5 か所を学生が担当したが、生地の仕込みが間に合わず、地区の方に手伝っていただいた。参加者は学生 4 名、地区の方 6 名、教員 1 名であった。

図表 6　南会津町「伊南川あゆまつり」での販売ブース



3.2. 獨協大学「雄飛祭」における物産展の開催

獨協大学では毎年約 2 万人が来場する「雄飛祭」という学園祭を行っている。2018 年度は 11 月 2 日(金)・3 日(土)に開催された。このイベントでは、学園祭に参加している大学生を中心に耻風地区や南会津町の PR 活動を行うとともに、地元農産物の販売等も開催した。また、このイベントではより集客力を高めるために、喜多方市本村地区で活動している「獨協大学地域活性化プロジェクト大坪チーム」との共同開催とした。場所は本学創立 50 周年記念館(西棟)3 階ラーニング・スクエアで行った(写真 5・6)。

雄飛祭開催前の準備としては、主に会場設営や販売物のポップの作成、また地区の方から送っていただいたパンフレット置き場の準備、福島県集落復興支援事業資料の掲示、両替用硬貨の準備、販売品搬入・準備、プロジェクター準備を行った。販売品目は図表 7 の通りである。

写真 5・6 「雄飛祭」で物産展を開催した時の様子

撮影日 2018 年 11 月 2 日

図表 7 「雄飛祭」販売品目

項目	単価
蕎麦ポン	¥200
トマトジュース	¥150
蕎麦の実	¥500
蕎麦粉 500 g	¥700
蕎麦粉 1kg	¥1,300
大根	¥100
紅三太	¥100
赤大根	¥100
紅心大根	¥150
青長大根	¥100

地区の方に当日持ってきていただいた野菜をはじめ、地区の特産品を中心に販売を行った。なかでも獨協と耻風地区でコラボした「蕎麦ポン」は今回の雄飛祭で初めて商品化し販売した商品である。蕎麦ポンはもともと地域の方が自宅で食べるように作っていたものであったが、試食させていただき商品化の話に至った。「蕎麦ポン」に貼るラベルを獨協とのコラボがわかるようにした(図表 8)。

図表 8 「蕎麦ポン」ラベル

1 日目は平日だったということもあり、来客数は少ないように感じたが、2 日目は多くの方が来場していた。地区の野菜は新鮮さと普段見かけないものが多かったため、多くの方に人気であった。また蕎麦ポンは若い世代からお年寄りまで幅広い世代に人気があり、売れ行きも好調であった。またパンフレットのブースにも興味を持っていただき、宣伝も行うことができた。2 日間を通して、草加市民の方や来場していただいた方に地区のことを知ってもらうことができた。

反省点としては、野菜の保存方法など参加者全体で雄飛祭のルールを把握すべきであったということや、販売場所の検討をすべきであったということが挙げられる。販売場所が

あまり人の通らない場所であったため、中庭などのいろんな方から見てもらえる場所がよいと感じた。また、雄飛祭期間中のお客さんへの宣伝も行うことでさらに集客数を望めたであろう。次年度行う際は、ビラ配りやプラカードで当日の宣伝を行いたい。

3.3.「草加ふささら祭り」への共同出店

「伊南川あゆまつり」でガレット、地区の野菜を販売した経験をもとに、草加市で毎年秋に開催されている「草加ふささら祭り」に出店した。「草加ふささら祭り」とは、草加の観光コミュニティをさらに推進し、市民参加による「賑わいとイベントによる地域再生」を市内外に強く発信することを目的とした草加市最大のイベントである。2018 年度は 11 月 3 日(土)・4 日(日)に開催され、大竹チームは 4 日に出店した。

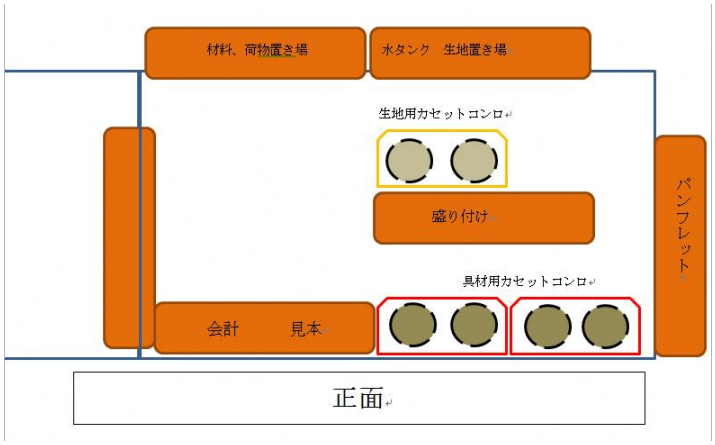
「伊南川あゆまつり」で好評だったベーコンレタストマトのガレットと、新たに南会津町でよく食されているラム肉をトマトと一緒に煮込んだものを挟んだ新メニューを追加し、2 種類のガレット、地区産野菜、南会津の地酒、南郷トマトジュースなど、南会津町ブースと呼べるほどの品揃えとなった。ガレットは 1 つ 400 円で販売し 14 時頃から値下げを行い、目標販売個数である 100 食を売り切ることができた。来場者にガレットのイメージが伝わりやすいよう試食も用意した。今回は特に耻風地区を草加市に PR することをねらい、地区の風景写真、スキー場などのパンフレットを展示した(写真 7・8)。

写真 7・8　「草加ふささら祭り」でのガレット販売の様子

撮影日　2018 年 11 月 4 日

図表 9 は当日のテント内のレイアウト図である。何を売っているのかわかりやすくするために具材を調理する自立式の 2 口カセットコンロ 2 台を正面に配置した。また、生地の焼成専用に同じタイプのカセットコンロを奥に 1 台配置した。役割としては、会計、呼び込み、具材調理 2 人、生地焼成、盛り付けであり、野菜や生地の下処理と買い出し等をすべて学生が担当した。参加者は学生 7 名、地区の方 5 名、教員 1 名であった。図表 10 は「草加ふささら祭り」での収支表である。

図表 9 「草加ふささら祭り」での販売ブース



図表 10 「草加ふささら祭り」収支表

収入

項目	単価	個数	合計
蕎麦ポン	¥200	26	¥5,200
トマトジュース	¥150	21	¥3,150
蕎麦の実	¥500	2	¥1,000
蕎麦粉500g	¥700	1	¥700
蕎麦粉1kg	¥1,300	0	¥0
大根	¥100	2	¥200
紅三太	¥100	2	¥200
赤大根	¥100	1	¥100
紅心大根	¥150	3	¥450
青首大根	¥100	4	¥400
計			¥11,400

ガレット収入

項目	単価	個数	合計
ラムトマト	¥400	32	
	¥200		
ベーコンサルサ	¥400	40	
	¥200		
計		72	¥22,000

支出

項目	単価	個数	合計	備考
ショクニク	¥2,200	1	¥2,200	11/1 フクエストア
養生テープ	¥189	1	¥189	11/1 ビバホーム
クリアコップ	¥570	1	¥570	
買い物袋L	¥108	2	¥216	11/3 ダイソー
買い物袋M	¥108	1	¥108	
ウェットティッシュ	¥108	1	¥108	
除菌スプレー	¥108	1	¥108	
使い切り～	¥108	1	¥108	
ホームキーパー	¥108	1	¥108	
フードパックM	¥108	4	¥432	
バーガーパック	¥108	10	¥1,080	
泡だて器	¥108	1	¥108	
サルサ	¥258	2	¥516	11/3 いなげや
キャベツ	¥199	4	¥796	11/3 ベルクス
薄力粉	¥159	2	¥318	
塩コショウ	¥199	1	¥199	
ベーコンスライス	¥299	8	¥2,392	
玉ねぎ	¥199	7	¥1,393	
レタス	¥149	5	¥745	
サラダ油	¥178	1	¥178	11/4 ドン・キホーテ
キッチンペーパー	¥128	1	¥128	
パック	¥98	3	¥294	
プレート皿	¥348	2	¥696	
サルサ	¥278	1	¥278	
ガスボンベ	¥248	2	¥496	
計			¥13,764	

今回の物産展にあたり、学園祭の翌日であることから、部活動等に加入しているメンバーは片づけに追われ、動員できる人員の確保に課題があった。そこで喜多方市本村地区に本事業で参加している猪爪代表に協力をお願いした。本学からは本事業で 3 つの地区に学生が参加して独自の活動を行っていたが、今回の協力により大きなイベントの際には人員を融通する良い事例となった。

3.4.「獨協大学環境週間"Earth Week Dokkyo"」における物産展の開催

"Earth Week Dokkyo"は獨協大学の国際環境経済学科・環境共生研究所が開催するイベントである。国際社会を取り巻く環境や本学のエコキャンパス推進の方針を受けて、地球環境保全に関する啓蒙活動を実施し、キャンパスライフを見直して一人ひとりに何ができるかを考えて行動に移すきっかけづくりを行っている。福島の復興支援の一環として、6 月 25～30 日に行われた"Earth Week Dokkyo 2018～Summer～"で物産展を開催し、本活動と耻風地区について主に学生・地域の方々に知ってもらうため参加した。また、夏の物産展では耻風地区の主な収穫物である蕎麦を活用した蕎麦粉・蕎麦の実の販売を行った(写真 9・10)。

写真 9・10　"Earth Week Dokkyo 2018 ～Summer～"での物産展の様子

撮影日 2018 年 6 月 25 日

物産展を行ったことにより、地区の産物の販売、壁新聞の掲示を通してこの事業や耻風地区について知ってもらうことができ、蕎麦の実は主に周辺地域の主婦層や女子学生の評価を得られた。

また、蕎麦粉については埼玉県の大袋にある蕎麦屋の店主の方以外に主婦の方が何名か買われていったが基本的には家で蕎麦を打つことは難しく、蕎麦を打つ以外の使い道がわからないなどの理由から購入に至らないケースが多かった。売上合計は 25,860 円であった(図表 11)。

図表 11 "Earth Week Dokkyo 2018～Summer～"の売り上げ

項目	単価	売上個数	売上
蕎麦粉	¥650	24	¥15,600
蕎麦の実	¥540	19	¥10,260
合計			¥25,860

反省としては、購入層やどれだけの人数が興味を持ってくれたかを知るために商品を購入してくださった方の年代や性別、また、来場人数を正確に記録すべきであった。そして今

回、地区との連絡が遅くなり品物の輸送方法や品物の種類確定、販促のビラへの内容記載が遅れてしまった。このことから地区との円滑な連絡が不可欠であることを認識したため、各イベントで連携を心がけたい。販促のビラのほか、ポスターを使っての呼び込みや参加学生の SNS による宣伝などを行ったが宣伝期間が短かったためか認知度が低かったので、宣伝期間を延ばすなどの対応が必要である。さらに、大学での物産展は初の試みであったため売り場づくりが上手くいかなかった。そのため、今後に向け買いやすい売り場づくりを目指す必要があった。

夏季に参加した際に好評であったことから、耻風の認知度向上のためのほかに、継続して来場者の反応を調査していくため、2018 年 12 月 10～15 日に開催された"Earth Week Dokkyo 2018～Winter～"に参加した(写真 11)。この冬季のイベントでは同じく復興支援を行っている喜多方市本村地区大坪チーム、田村市瀬川地区米山チームとの合同物産展の形で参加した。夏季のイベントでは地区の野菜や加工品を販売することができなかったため、冬季は野菜、蕎麦の実を使ったポン菓子、山菜の加工品を販売した。蕎麦の魅力を知ってもらうため、蕎麦茶と蕎麦の実のスープの試食も実施した。

写真 11 "Earth Week Dokkyo 2018～Winter～"の物産展の様子

撮影日 2018 年 12 月 14 日

図表 12 は最終日のレイアウトである。近隣住民も行き来する 35 周年記念館前の広場に向かって売り場を設営した。蕎麦リゾットはあらかじめ環境共生研究所で調理し、売り場にレンガで置台をつくり、IH コンロで保温しつつ蕎麦茶を配布した。蕎麦茶は作業台の IH コンロで湯を沸かし入れたてを配布した。売り上げ、経費は図表 13、図表 14 のとおりである。

図表 12 “Earth Week Dokkyo 2018～Winter～”での販売ブース

図表 13 “Earth Week Dokkyo 2018～Winter～”での販売品目と売り上げ

項目	単価	販売個数	金額	備考
赤大根	¥100	8	¥800	
	¥50	1	¥50	土曜日のみ1本¥50
大根	¥100	9	¥900	
	¥50	2	¥100	土曜日のみ1本¥50
白菜	¥200	3	¥600	
	¥100	5	¥500	土曜日のみ1玉¥100
	¥50	3	¥150	土曜日のみ半分¥50
そば粉	¥600	14	¥8,400	
そばの実	¥500	20	¥10,000	
そばポン	¥150	7	¥1,050	
	¥100	91	¥9,100	木曜日から1つ¥100
深山の味 山菜たまり	¥600	5	¥3,000	
山うど伽羅助	¥600	10	¥6,000	
合計			¥40,650	

図表 14 “Earth Week Dokkyo 2018～Winter～”での経費

項目	単価	個数	金額
ペーパーカップ	¥108	2	¥216
水	¥91	2	¥182
合計			¥398

冬季のイベントでは、夏季のイベントでなかなか購入に至らなかった蕎麦の実と蕎麦粉の良さを伝えるため蕎麦茶、蕎麦の実のポン菓子、蕎麦の実と地元野菜を使ったスープの試食を行ったことから、夏季のイベント時より興味を持ってくれた方が多かったように感じた。また、今回は作成した広報用チラシ 1,000 枚以上を周辺住民へポスティングしたため、来場者が多く訪れた(図表 15)。この成果より、次年度以降も試食と周辺住民へのポスティングを加えて物産展を開催したい。

図表 15　広報用のチラシ

反省としては、雄飛祭、「草加ふささら祭り」の事後処理などに追われ、"Earth Week Dokkyo"参加への決定が遅くなり、大坪チームへ参加申請を任せてしまった。また、途中で瀬川地区米山チームとも合同開催が決まり、配布予定だったチラシが脱稿直前で差し替えになり、差し替えた原稿の完成が遅れたため、ポスティングスケジュールが混乱してしまった。また合同にも関わらず各チームの参加時間、参加日程がそろわなかったために来場者からの問い合わせもあった。また、主催者の人員の確保が難しく、来場者数や販売戸数の把握をしきれていなかった。

"Earth Week Dokkyo"での物産展開催を通じて、販売に携わる私たち自身が何のために物産展を行っているか、どれほど多くの人に耻風地区を知ってもらいたいかなどの共通認識・目標を持つべきであると感じた。また、多くの大学生がこのような事業に興味・関心があることが分かった。蕎麦の実は普段目にする機会があまりないため、より注目されていた。注目が購入につながるようもっとアピールできるようにするべきであった。販売品目内容・価格設定・売り場作りは改善した方がより良いと考える。

4. 今年度実施した実態調査

4.1. 耻風地区鬼渡り神社における神事体験

耻風地区にある鬼渡り神社で年に 1 回行われる神事に参加し、貴重な体験をすることができた(写真 12・13)。鬼渡り神社の祭神は阿須波神と波比神は 1730(享保 15)年に設立された。現在は年に 1 回行われる神事以外は入ることができないほど、大切に管理されている。神事が始まる前は地区の方々と清掃や準備の手伝いをすることができた。神事は主に男性が参加し、女性は神様へのお供え物の準備などをする光景が見られた。社殿内は戦前からの品々が大切に保管されており、地域の人々が協力しながら伝統を受け継いできていることが分かった。大学に戻り由来を調べた所、座摩神という宮廷内を守る 5 人の神が鎌倉時代の武家の尊崇を集めていたとされ、そこから由来が取られた説と、会津では白い鳥を生贄に捧げる風習が残っており、ニワトリ神社やニワタリ神社が転じ鬼渡り神社に転じたという説がある。いずれにしても、地域の守り神として領地を守る神として崇められたのは間違いない。

今後の課題として、古くなってきている神社の修繕すべき部分を住民と確認を取って直していきたい。

写真 12・13　神事の様子

撮影日 2018 年 9 月 11 日

4.2. 耻風付近の飲食店調査

9 月に耻風地区を訪問した際、主に会津田島駅周辺～耻風地区の範囲で飲食店調査を行った。道沿いに目立った飲食店は少なく、メインは道の駅と、会津田島駅周辺の飲食店であり、私たちが見つけた飲食店の軒数はウナギ店、お好み焼き店、イタリアンのお店、道の駅、会津田島駅に併設しているレストラン 2 軒の計 5 軒であった。これらは道の駅のレストラン以外は会津田島駅周辺に位置しており、耻風地区に近づくにつれて飲食店は少なくなっていった。地区の方の話によると、観光客向けの飲食店も少ないが地区の若者たちが集い、語らうような飲食店も少ないとのことであった。

4.3. 蕎麦打ち練習

地区の特産である蕎麦の宣伝のために、打ち立て蕎麦の無料配布を行うことを考案した。そのため、2 月 7 日に南会津町、2 月 20 日に学内で、2 度の練習を行った。2017 年度は蕎麦粉十割で生地をたたまずに包丁で切る裁ち蕎麦を体験したが、当て木を使わずにまっすぐに切るには相当な技量が必要と感じた。そこで 2018 年度は江戸流の蕎麦打ち（普通の蕎麦の打ち方）で二八蕎麦を、南会津町内の蕎麦打ちの段位保持者の方にお願いし、伊南支所で練習を行った(写真 14)。講師 1 名に対し学生が 2 名で 2 組に分かれて蕎麦を打ったが、茹で上がった後の感触の差がはっきりとわかり驚いた。切り方はある程度の練習で均一になるが、こね方は人により力加減が変わり、このことが食感の違いに出るのではないかと思った。その後、学内において本事業で喜多方市本村地区に入っている大坪チーム内で結成された蕎麦打ち同好会と合同で練習を行った(写真 15)。蕎麦粉と水の分量を正確に計量しても、生地の混ぜ時間、室内の乾燥度合いによって生地のまとまり方に違いが出てしまい、修正をするには経験を積まないと難しいと感じた。

今後も学内で練習を続け、「草加ふささら祭り」や“Earth Week Dokkyo”での実演・配布に向けて準備をしたい。

写真 14　南会津町伊南支所にて

撮影日 2019 年 2 月 7 日

写真 15　獨協大学にて蕎麦打ちを行った様子

撮影日 2019 年 2 月 20 日

5. 次年度以降に向けた企画提案

2018 年度の実証実験の取り組みとして耻風地区の課題である、若年人口の増加に向けた取り組みを行った。具体的には交流人口と関係人口の増加に資すると思われる取り組みとして、地域の祭りや大学の学園祭での地区との共同開催を行った。それらを通して地域の人々との交流を深めたことによりこれまでよりも関係を深めることができ、その地域を訪れたことのない学生や草加市民への一定の PR 効果を上げることができた。

次年度の取り組みをより良いものとするため、今年度の反省点などをふまえて以下の提

案をする。

5.1. 南会津町「伊南川あゆまつり」出店の継続に関する提案

「伊南川あゆまつり」では南会津町の方々に蕎麦粉を使ったガレットが好評で、売上も上々であった。値段設定については 400 円で販売していたが、「高い」という来場者の声も聞かれたので、次回はもう少し安く販売することでさらに売上が向上するのではないかと考えている。また、「あゆまつり」の反省点として挙げられるのが、私たち販売者の効率化が挙げられる。人手不足というのもあり上手くローテーションをすることができず、お客さんを待たせてしまうことや、背を向けての作業が多く見られた。途中、材料不足により急遽作り足すという事態も発生した。このことを踏まえて、次年度からはガレットの目標販売枚数の明確化や、人手を増やし効率の良い配置を作ることで、さらに売上が伸びると考えられる。「あゆまつり」でガレットを販売することで、南会津町の方々との新しい交流ができ、さらに交流を深めることで今後の新たな活動につながると考え、「伊南川あゆまつり」による次年度の出店継続を提案する。

5.2. 獨協大学における物産展開催に関する新たな提案

3.2、3.3 に記載した獨協大学で開催される物産展の次年度継続開催に向け、新たな提案をする。1 点目は、マーケティング調査である。マーケティング調査を行うことで、より消費者のニーズに合わせた商品の販売が可能であり、消費者のニーズに合った販売を行うことで、より多くの方に手にとっていただくことができ、「耻風産」の魅力を伝えることができるのではないかと考えた。2 点目は、売り場づくりの改善である。物産展での商品の売り場を見直し、改善することで、購買意欲の向上が予想される。また、売り場の見直しは費用がほとんど掛からないため、余計な支出を抑えることが可能である。3 点目は、販売品目を多様化することである。販売品目を多様化することで、より多くの集客が見込まれる。また、販売品目の多様化に伴い、消費者に対する情報がより多くなり、これが間接的に耻風地区を周知してもらう情報源にもなると考えた。以上の理由から、マーケティング調査・売り場づくり・販売品目の多様化を提案する。

5.3. 耻風の特産品を用いた商品開発継続の提案

耻風地区の特産品である蕎麦粉、蕎麦の実を用いた商品開発の継続の提案をする。今までの活動において、「伊南川あゆまつり」、「草加ふささら祭り」では蕎麦粉を使ったガレットの販売をし、“Earth Week Dokkyo”、「雄飛祭」では蕎麦の実を使った蕎麦のポン菓子を販売した。蕎麦のガレットは人気で特に高齢層には好評であった。今後ガレットの中身は今までと同じく南会津の特産品にちなんだものにし、それに加えて新たにスイーツのガレットを考案し販売することを視野に入れている。これにより、高齢層だけでなく若者も注目し、さらなる特産物の周知と売上の向上が見込まれると考えている。蕎麦の実のポン菓子を販

売したところ、蕎麦を使って作られている珍しさ、おやつ感覚で食べられる気軽さ、手ごろな価格設定から、幅広い年代の方から人気があることが分かった。今回販売して得た成果を活かして耻風の特産物を使った商品を考案し、更に 4.5 で説明したオリジナルのラベルも引き続き使用して様々な場面で販売していくことで、耻風地区の認知度向上に繋がると考えている。

5.4. 耻風住民向け広報誌「風の子通信」の継続刊行及び広報強化にむけた提案

耻風地区の方に活動を認知してもらうため、現在発行している広報誌「風の子通信」であるが(図表 16・17 参照)、この広報誌を継続させるとともに、多くの方に見てもらえるよう広報の強化に向けた提案を行う。

図表 16・17　風の子通信創刊号(11 月号)・12 月号

風の子通信

創刊号

2018年（平成30年）
11月11日
発行
獨協大学　福島県
集落復興支援事業

参加メンバー一覧
飯島竜太郎（四年）
山田雄大（四年）
小林風夏（二年）代表
荒井眞子（二年）副代表
中川里佳子（二年）
澤田美結（二年）
羽賀咲弥加（二年）
山本有紗（二年）
森涼太（二年）
大竹伸朗准教授（指導教員）

十月十四日、伊南川あゆまつりが秋晴れの下に開催されました。耻風は獨協大学の学生四名とともに出店しました。地区からは恒一さんのカブやカボチャなどの野菜、隆伸さんのそばの実が、獨協大学は地区で採れたそば粉を使ったガレット（そば粉を水で溶いて伸ばし焼いた生地に、ベーコンやトマトなどの具を挟んだもの）とペットボトル飲料、缶ビールを販売しました。

会場は多くの人でにぎわい、お昼時には一時行列ができるほどで、目標としていた百食のガレットを完売することができました。地区の野菜や南郷トマトも好評だったほか博信さんと会津若松まで仕入れたソフトドリンクが完売となりました。九月に行われた宮のぼりにお手伝いとして参加されていた縁で、大原まきさんが準備から当日の調理までスペシャルゲストとして手伝ってくださいました。またカセットコンロを お貸し頂いた佐伯さん、集会所の片づけをしていただいた方々、多くの方々に大変お世話になりました。

Tシャツには地区に広がる蓮畑の蓮をイラスト化しました。「I ラブ耻風」と読みます。

山本佐知子さんが可愛いストラップを作ってくださいました。

風の子通信

2018年(平成30年)
12月28日
発行
獨協大学　福島県集落復興支援事業大竹チーム

参加メンバー一覧
飯島竜太郎（四年）
山田雄大（四年）
小林風夏（二年）代表
荒井眞子（二年）副代表
中川里佳子（二年）
澤田美結（二年）
羽賀咲弥加（二年）
山本有紗（二年）
森涼太（二年）
大竹伸朗准教授（指導教員）

雄飛祭で耻風地区の物産展

十一月二日、三日獨協大学千学園祭「第五四回雄飛祭」が開催されました。耻風地区は、地区と集落復興支援事業を広伝するため物産展を行いました。

当日は隆伸さん親子が、大根などの新鮮野菜、南郷トマトを使用したトマトジュース、そば粉そばの実を車で搬入し、売り場にも立ってくださいました。どの商品もとても好評でしたが、中でもそばポン興味を持つ方が非常に多く、その味の美味しさにリピーターの方もいらっしゃいました。

落ち着いた教室の中で来場された方々は熱心にポスターや南会津町のパンフレットに見入っていました。この二日間で学内だけでなく、一般の方にも福島のこと、耻風のこと、さらにはこの事業を知っていただくことができたと思います。今年の雄飛祭全体では延べ１万９千人の来場者がありました。

今回隆信さんの協力によりそばポン菓子を２００円でテスト販売しました。麦外なお味わいを獨協×耻風のシンプルなシールで表現しました。

まず、発行ペースを定める。現在は、学生がイベントに参加した時に広報誌を発行していたが、月 1 回を目安に発行することで新しい情報を共有することが可能になる。執筆者や広報誌に載せる写真を撮る担当もあらかじめ決めておくことで、継続して行っていきたい。内容としては、耻風地区の近況や様子、また獨協×耻風イベントの広報や様子も記載していきたい。地区の近況や様子に関しては、毎回訪問することが難しいため、地区の方と頻繁に連絡を取り、イベントや季節の写真、会議の様子を報告していただくとともに写真も送っていただく。これにより、月 1 回での発行が可能になるとともに、つねに地区の方と意思疎通を

図ることが可能となる。獨協×耻風イベントもこれまでは報告という形で広報誌に記載していたが、イベントの予定を事前に広報できるようにしていきたい。

次に掲示場所である。「風の子通信」は耻風の住民向けに作成されているものであるが、多くの方に耻風地区に足を運んでいただくためには、多くの人の目に留まるような場所に掲示しなければならない。そこでまずは学生に知ってもらうため、獨協大学内に掲示板を設け掲示していきたい。また市役所や駅にも声掛けし、地区の集会場やバス停、市役所にも掲示してもらうことでさらに大きな宣伝効果を得ることが予想される。

5.5. 蕎麦打ちイベントの開催による耻風地区の認知度向上にむけた提案

“Earth Week Dokkyo”、「草加ふささら祭り」での蕎麦打ちイベントを行うことができれば集客率が上がり、より多くの方に耻風地区の魅力を知ってもらうことができるのではないかと考える。今年度も昨年度に引き続き地区で蕎麦打ちを習ったので、いずれ学生が蕎麦を打てるようになり物産展などのイベントで披露し、ふるまうことができれば地域の PR の可能性が広がるとおもわれる。地域の方々と蕎麦打ちに関心がある獨協大学の学生や教職員を対象に蕎麦打ち同好会の結成を提案したい。

6. おわりに

今回、獨協大学地域活性化プロジェクト大竹チームは、耻風地区の認知度の向上や耻風地区の特産品である蕎麦粉や蕎麦の実を使ったレシピの考案・販売などを行った。大竹チームが行った実証実験は主に 4 つであった。

1 つ目は、10 月 13～15 日に参加した南会津町「伊南川あゆまつり」である。事前に作成したオリジナル T シャツを、参加した先生、学生、耻風地区の方全員で着て、何度も試作を繰り返して完成させた蕎麦粉のガレットを販売した。初めての試みではあったが、販売目標であった 100 食を完売させることができた。2 つ目は 11 月 3、4 日の獨協大学学園祭「雄飛祭」での物産展の開催である。地区の方に持ってきていただいた野菜や、蕎麦粉・蕎麦の実、そして蕎麦の実で作ったポン菓子「蕎麦ポン」も販売した。さらに、地区やその周辺地域の情報を来場者に知ってもらうためにパンフレットも置いた。3 つ目は 11 月 4 日に行われた「草加ふささら祭り」への参加である。ガレットはベーコンレタストマトと、ラム肉をトマトと一緒に煮込んだものを挟んだ新しい味を販売し、目標であった 100 食を完売することができた。その他にも地区産野菜、南会津の地酒、南郷トマトジュースなども販売した。最後は夏季と冬季に開催された“Earth Week Dokkyo”において 2 回物産展を開催した。夏季は蕎麦粉、蕎麦の実を販売した。冬季は、夏季に売ることができなかった地区の野菜や蕎麦ポン、山菜も販売し、蕎麦の実で作ったスープを試食として提供した。また、広報用のビラを作成し、周辺住民にポスティングをしたことで、夏季に開催した時よりも来場者が多く訪れた。

またこれらの実証実験に加えて、現地の実態調査も新たに行った。耻風地区に古くからある鬼渡り神社で神事体験をした。また、会津田島駅周辺～耻風地区までの飲食店調査も行った。この調査から、耻風地区の周辺には目立った飲食店が少なく、若者が気軽に集えるような場所も少ないことがわかった。

今年度は地区の方が何度も大学に足を運んでくださり、何かあるたびに地区の方でも集まって学生側と電話会議を行ったことから、円滑な意思疎通を図ることができるようになった。学生側も昨年度参加した中から 5 名のメンバーが継続し、地区の方と交流を重ねるにつれ、さらに深くお互いを知ることができたように思う。改めて、本年度の活動にご協力いただいたすべての地区の皆様、南会津町伊南支所の皆様、福島県職員の皆様、獨協大学教職員の皆様に感謝申し上げる。蕎麦打ち指導をしてくださった耻風地区の方々のご協力にも感謝申し上げる。指導教員である大竹先生にはご多忙の中、何度も福島へ引率していただき、実証実験内容から事務手続きに至るまで様々な事柄にご指導を頂いた。

来年度もメンバーの入れ替えがあるが、一度できたこの繋がりは今後も継続していきたいと考えている。卒業するメンバーも大竹チーム OB として、節目には連絡を取り合いながら、時には耻風を思い出したいと思う。